

『文化のビーズ、文明のビーズ——縄文、エジプト、現代社会——』開催報告

平成 30 年 11 月 4 日に岡山市立オリент美術館にて、「人類とビーズ」（ビーズ展をもっと深く知りたい人のための講座）として、『文化のビーズ、文明のビーズ——縄文、エジプト、現代社会——』が開催されました。58 名の出席者を数えました。

「装う」ものとしてビーズには素材、技術、社会文化とのかかわりといった視点でアプローチすることができるとする趣旨説明に続き、松本直子岡山大学教授は「文化のビーズの発生と変容：縄文時代から弥生時代にかけての玉類の変化」と題し、緑色の装身具に着目して詳細なデータに基づいて縄文～弥生時代を論じました。山花京子東海大学准教授は、「地域をつなぐビーズ：古代エジプトにおけるビーズの役割」と題し、認知革命に言及しつつエジプト王朝におけるビーズを、王と家臣という「人と人」とを結ぶ存在として、また交易品として「地域と地域」を結ぶ存在として論じました。本拠点長である池谷和信国立民族学博物館教授は「ビーズ展示からみえるホモサピエンス像」と題し、文明と文化のファーストコンタクトとしてのガラスの道を論じました。

コメントとして、那須浩郎岡山理科大学准教授は植物考古学の視点から、ビーズに選ばれる植物の種子の条件を考慮しつつ、素材の伝播や希少性に言及しました。谷一尚林原美術館長は古代ガラス研究の視点から、装身具の役割を指摘しました。

なお、本講座に先立ち開催されたギャラリートークでは 28 人が参加しました。

